

1. 課題名 天敵温存植物を用いたナスのアザミウマ対策

2. 目的

徳島県の主要な農産物の一つであるナスの主要害虫としてミナミキイロアザミウマがある。この害虫は近年薬剤への抵抗性を備え防除が困難になりつつある。従来の農薬中心の防除では薬剤の経済的負担および作業者の肉体的負担が大きい。こうした問題への対策として農薬に頼りすぎない多様な防除方法の利用が求められている。

今回はアザミウマの土着天敵ヒメハナカメムシ類を定着させる方法に着目し、試験を行った。天敵温存植物としてフレンチマリーゴールドとブルーサルビアを選び、それぞれナスと共に植栽し、通常の栽培方法との防除効果を比較した。

3. 方法

試験期間：6月18日(収穫初め)～10月27日(収穫打切)

収量の調査はせん定、台風11号到来を境にして3期、品質、アザミウマ発生、ヒメハナカメムシ発生の調査は台風11号到来を境にして2期に分けた。

試験区：第1区(慣行区)、第2区(フレンチマリーゴールド植栽)、第3区(ブルーサルビア植栽)

栽培方法：ナス 品種 「千両2号」

5月7日定植、1区15株、畝幅2m、株間0.8m、4本仕立て
フレンチマリーゴールド 品種 「リトルヒーローオレンジ」

5月14日定植、120株、株間0.2m、1条植え

ブルーサルビア 品種 「ファリナセア ビクトリアブルー」

6月19日定植、132株 株間0.2m、1条植え

調査項目：1株当たりの収量、品質(秀品率)、防除回数、アザミウマ発生(被害果率)、
ヒメハナカメムシ発生数(20花当たりの数)

4. 結果の概要

品質(秀品率)は、台風11号到来までの段階では第3区が最も高く、台風後では第2区が最も高かった。

1株当たりの収量と防除回数においては各区に大きな差が見られなかった。

アザミウマ被害果率は台風前後とも第3区が最も低かった。第2区は台風前後とも最も高かった。

ヒメハナカメムシ数について、台風前は第3区、台風後は第2区が最も多かった。

5. 考察

1株当たりの収量においては各区で差がなかった。これは害虫対策を主とした試験を行ったためであると考えられた。

第3区で後期の品質低下が見られたのは第3区が土地の水はけが悪く、台風11号到来後の暴風や大雨等で被害を受けたことによると考えられた。

農薬散布についてはアザミウマ多発時の8月に台風が到来し、ナスが収穫できなくなり、葉も多くが落ちたことにより、各区の散布回数に差が見られなかったと考えられた。

アザミウマ被害果率については第2区の周辺ではアザミウマ類が発生する果菜類が栽培されていたことか

ら被害果軽減に結びつかなかったことが推察された。

ヒメハナカメムシ数については第3区のブルーサルビアが最も多くなったが、台風通過後の後期では減少した。しかし、第2区のフレンチマリーゴールドは台風通過後も生育旺盛だったことから、ヒメハナカメムシ数が確保された。このことにより後期は第2区が最も多くなったと考えられた。

フレンチマリーゴールドとブルーサルビアはヒメハナカメムシ数の結果から天敵温存植物としての役割があることが確認できたと考える。ただし、減農薬、労力削減の点では更なる調査が必要と考える。

これらのことから、ブルーサルビアは天敵温存植物としてより効果があると考えられた。

6. 主要な試験データ

表1 各区の株当たり収量

収穫期間	試験区別の収量(kg/株)		
	第1区	第2区	第3区
前期(6月18日～7月9日)	2.24	2.12	2.39
中期(7月16日～8月8日)	3.69	4.71	4.13
後期(8月25日～10月27日)	6.21	6.28	6.72

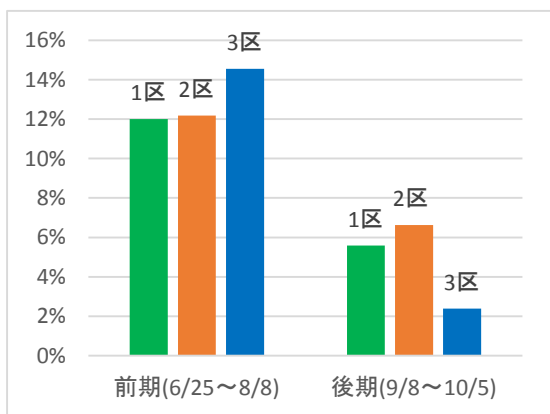


図1 各区の品質調査(秀品率)

表2 散布農薬一覧

	1区	2区	3区
6月20日	コテツフロアブル		
7月7日	コロマイト乳剤+ダゴニール1000		
7月11日	ランマンフロアブル		
7月25日	コテツフロアブル		
7月30日	トルネード		トルネード
8月11日	ランマンフロアブル		
8月19日	コロマイト乳剤		
9月5日	プレオフロアブル		
9月10日	プレパソフロアブル5		
9月26日	コテツフロアブル+ベルケート水和剤		
10月1日	ストロビーフロアブル		
10月6日	ダゴニール1000+プレオフロアブル		
10月14日	ダゴニール1000		

1区16回 2区15回 3区16回

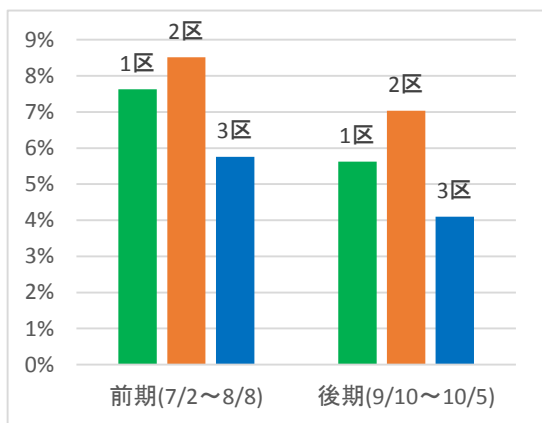


図2 アザミウマ被害果率

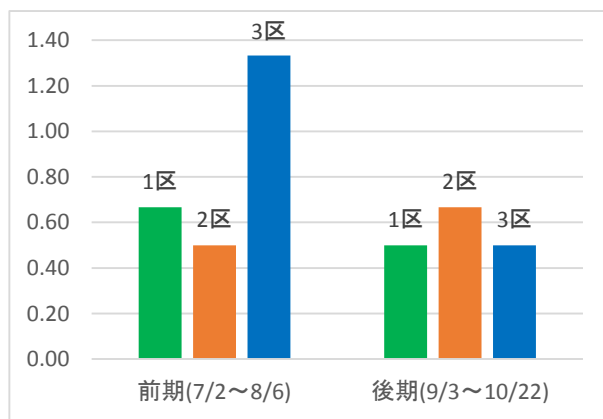


図3 ヒメハナカメムシ数(20花当たり)